MADE IN SHIMONOSEKI
まちの主役

下関市芸術文化祭 大賞受賞 久保圭子さん

「味があり、コクがあり、しばらく美味な文章に浸っていた」と審査員から評された随筆を書いた、昭和2年生まれの久保圭子さん（94歳）を、随筆とともに紹介します。

すべてに感謝し幸せを感じます

久保さんが、文章を書き始めたのは60歳を過ぎた退職後のことです。市民のための文章教室に通いました。以来、30年以上にわたり、先生から出される四季折々の課題で、随筆を書いてきました。

「働いているときは忙しくて、桜が咲いても見に行くことがありませんでした。年を重ねてからの方が、人生は味わい深いと思います。クモの糸がキラキラしているのを見ても、きれいだなと思って、感謝と幸せを感じます。課題を頭に置くことが生きていく上で大切なことです」と話します。

昨年、文章教室の仲間に勧められて、第14回下関市芸術文化祭文芸部門の随筆に初めて応募し、大賞を受賞。「作品を読んだ方から『励みになった』『幸福をありがとう』などの手紙を頂きました。こんなことが起こるなんて夢のようです。一生のうちで、こんなに人に喜んでもらえることがあって、本当にうれしいです。人生最後に頂いたご褒美だと、すべてに感謝しています」と目を細めます。

息子の敦司さんの目には、久保さんがどのように映っているのでしょうか。「母は、季節の移ろいを見て、文章を考えることが生活の軸になっています。二人でドライブをしていても、〝雲ふたつ合はむとしてはまた遠く　分れて消えぬ春の青ぞら〟と若山牧水の短歌を口ずさんだり、まるで恋する乙女です。好奇心が旺盛で、いろいろなことを実際にやってみるのが元気の秘訣だと思います。大賞を頂いたことで、母が書きためたものを改めて読み返しました。母は『人様にお見せするものでもない』と言いますが、昭和・平成・令和と生きた足跡が書かれており、資料としても面白いと思いました」

久保さんは話します。「下関はとても良い街で、永年この地に住めていることを幸せと感じ、誇りに思っています。私の文章を、この美しい下関の方に読んでいただいて、喜んでもらえるならば、これほど幸福なことはありません」

次頁に大賞を受賞した随筆を掲載します。

吝（しわ）ん坊の柿の種

久保圭子

この三月、私は九十三歳になった。

誰でもそうなのかと思うが、自分自身は年齢を常に意識して暮らしているわけではない。「長寿ですね」と言われて、あゝそうかと思うことが多い。歳を忘れているからこそ、臆面もなく人前に出られるのだ。

「命長ければ、恥、多し」と、古人は言う。老いは恥ずかしいことではないと判ってはいるが、衰えて能力を失った自分を恥ずかしいと思うことがある。

一人暮らしの自由な時間に起きて、茶を淹（い）れる。昨日のままの今日がある。何一つ動いていない。陽を避け、近所の目を避けてカーテンを引いた部屋は、少し昏（くら）く、室内に季節がない。窓際の小さい鉢植えの植物は、棘（とげ）のような葉を天井に向けて寄り添っている。明日も同じ姿勢を続けるだろう。

動かない部屋に季節はないが、時は流れる。カレンダーを破り、今日を思う。

誕生日が過ぎて春爛漫（らんまん）のころには、今年こそはと思う楽しみがあるのに、どこから湧いたのか、新型コロナウィルスが蔓延（まんえん）して、平和を壊してしまった。

近所の果物屋の店頭に並ぶ果物を見て、季節の訪れを知る。生気あふれる季節の芽吹きを愛で、旬を楽しむ。紀州の梅を漬けようと思ったり、次はらっきょうと、ささやかながらの幸せは大切にしたいのに、ウィルス感染が怖いので外出は禁止。週に一日行っているデイケアも休んで、人に会うこともなかった。一人暮らしをしていると、思いも沈滞してくる。つけっぱなしのテレビから流れる暗いニュースが、気持ちに追い打ちをかける。異常気象で降り続く集中豪雨による無残な災害地の実態や、終局の見えない新型コロナウィルスの情報に気持ちは沈む一方なのだ。

果物には想い出がある。四季折り折りの果物狩りに、産地を求めて、友人達とよくドライブをした。夏から秋の今の季節は梨を求めて出掛けた。豊田町・豊北町には梨園が多く、八月は幸水、九月に入ると豊水、十月にはあきづきと、時期によって次々に銘柄が変わる。懐かしい想い出は尽きることもない。いつも元気な夫が側にいた。

一人暮らしをする人に「生活不活発病」が流行っていると聞く。私もそうかも知れない。何もしないで、うずくまるように日々を過ごしているからだ。帰省した息子が設置していったスマートスピーカーに声をかける。

「ねえ、スピーカー。何をしているの？」

「どうやったらあなたをもっと笑わせられるか考えていました。いつでも話しかけてください」と言うが、スピーカーが相手では会話にならない。しょうがない。

居間の日めくりに先人の知恵を学ぶ諺（ことわざ）が書いてある。今日の諺は「吝ん坊（しわんぼう）の柿の種・けちな人は価値のないものでも惜しむ」である。

「吝ん坊」とは、けちんぼうのこと。けちな人は、役に立たない柿の種でも惜しがるという意味で、胸がちくりとする。私が今しなくてはならないことは終活である。家中どこを見ても処分しなければならない物で溢（あふ）れている。色々と手をつけ始めたが、まだ使えるものを捨てることは私にはできない。想い出も重なる。腰が痛い。曲がらない膝に湿布を貼ってひと休みとなる。誰か助けてと叫びたいが、やはり自分が決断しなければいけないのだ。戦時中に成長した私は、節約しろ、勿体ないの生活を強いられて、それが骨身に沁（し）み込んでいるのだろう。青春時代に美徳とされ、褒められていたことが、今では悪徳、欠陥といわれる時代になった。捨てろ、捨てろと言われて、どうにもならない自分を捨てたくなることがある。

レースのカーテンを通して見えるベランダに、一メートル程の柿の木がある。誰が育てたのでもないが、気づけば大きく育っていた。亡き夫がアトリエにしていた部屋だったので、私の剥（む）いた柿を食べたときに、種をぷっと吹き出しでもしたのだろうか。勝手に育ち、枯れもせず、春には若葉を、秋には紅葉を見せてきた。桃栗三年柿八年という。もう十年にはなるだろう。

「吝ん坊の柿の種」が柿の木になった。処分しなくてはいけないと、とつおいつ迷っていたのだが、考えたら、私に季節を告げてくれる数少ない存在の一つであり、「吝ん坊」でも愛しくなる。夫がそこにいるようで、夫への思いを重ね合わせて見まもっている。

日差しが翳（かげ）ってきた。平穏に過ぎた一日の幸せを感謝する。日暮れには、こんな穏やかな気持ちになるのだ。夕風がそよいで、柿の葉がひらりと舞った。